
ドロドロに溶けた太陽の下で

タクティカル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドロドロに溶けた太陽の下で

【Nコード】

N6536M

【作者名】

タクティカル

【あらすじ】

電波がゆんゆんしてる話です。

日曜日の朝、特にやる事が無かったので散歩に行くことにした。

自分の家であるクジラの口から出る。

「……暑いな」

空には太陽が三つ。

今日もご苦労なことだ。

「ずりゃー、どりゃー!」

ホースで水を撒きながら歩く。

ホースがそれ以上伸びなくなったので、近所の家に投げ込み逃げた。

「こん、こんっ……お腹空いたよぉ……こん、こん」

道を歩いていると、道端に蹲っている少女を見つけた。

今日の俺は紳士寄りなので、優しく声を掛ける。

「どうしたんだ?」

「お腹が空いたんです……こん、こんっ」

そりゃ大変だ。

腹が空いては何とやら、人類皆兄妹、助けることにしよう。

今日の俺は弱い者を見捨てることが出来ないモードだ。

「では狐の少女よ。この稲荷寿司をやるう」

「い、いえ……稲荷寿司は遠慮しますう……ゴキブリの次くらいに嫌いなので……」

「なんと」

まさか狐の癖に稲荷寿司が嫌いだとは……バナナ嫌いなゴリラ、勉強嫌いの吉田君みたいなもんか。

どの時代、場所にもこういった異端な存在はいるもんだなあ。

というかよくよく考えてみると、俺稲荷寿司なんて持ってなかった。

仕方ない、このおやつに取っておいた芋ヨウカン（手作り。ちなみに一番得意なお菓子は苳豆腐）をくれてやるとしよう。

「この異様に甘いヨウカンをやるう、狐の少女よ。なんか甘すぎて怖いけど、病み付きになるぞ」

「ありがとうございますう。あ、あと私は別に狐の女の子じゃありません」

細長いヨウカンを心なしカエロス漂う持ち方をする少女。

なんと狐の少女ではないらしい。これには俺もびっくり。

もう二度と狐なんて言わないよ。

「だが、先ほどからこんこんと鳴き声を」

「風邪です……こんこんっ」

「そうか、うつすなよ。うつしたら責任を取って結婚してもらっかな」

「け、結婚ですか！」

「俺の父親と」

「ゴメン被ります！」

「今なら母親もついてくるぞ？」

「シユラバーはゴメンです！」

そういえば両親は元気だろうか？

俺が20歳になったおり、二人で山に芝刈りに行って以来帰っていない。

しょうがないので俺が今でも川で洗濯をする当番が続けているのだ。

桃は流れてこない。

さて、狐少女はヨウカンを一本丸ごと食べて可愛く小さなげっぷをした。

「ありがとうございます！ この御恩は覚えてる限り忘れません！」

「うむ、その心意気やよし」

ただ忘れません、なんて口約束は信じられん。

いつそこまで開き直られたほうが心地いい。

「お、お礼と言っではなんですが……こんつ」
「うん？」

口の端のヨウカンのカケラをつけた少女は薄く頬を赤く染め、小さな手を両手で組んだ。

そのまま上目遣いで見つめてくる。

「あなた様のところに……こんつ、お嫁に行きます……こんつ」
「遠慮するこん」

「……こん」

うなだれた。

「では代わりにこの棒を差し上げます」

そうしてスカートの中から棒を取り出してきた。

こ、この棒は……！？

「ぼ、棒だ！」

「はい、棒です……こんつ、棒です」

「こん棒……そうだ、この棒はあれを何やかんやする……あの棒か」
「！」

「はいあの棒です」

「い、いいのか……こんな大層な棒を。……お高いんじゃないの？」
「いえいえ。その棒は我が家に伝わっているわけでもないその辺に落ちていた棒ですが……あなたになら託してもいい、そう思います、こんつ」

そんなにまで俺のことを信賴しているのか……。

ぐっと棒を握り締める。

先端から粘液状の緑色の液体が出てきた。

その液体をペロリと舐める。

ペロ、これは……クリームソーダ。

そう、この味はファーストキッチンのメロンクリームソーダ！

氷少なくしてもっと量を多くしろ。

「ありがとう大切にするよ」

「はい、それを私だと思って大切にしてください、こんつ」

狐の少女と別れて再び散歩に戻る。

棒をぶんぶん振り回しながら、せがた三四郎の歌を裏声で歌う。

道端の死んだように倒れていたおじいちゃんが、歌にあわせる様に立ち上がり歌にあわせる様に軽快なステップを繰り返した。

ボクサーがサイボーグ相手に壁際を利用した大ダメージコンボをお見舞いした。

空から落ちてきた少年少女とサングラスのおっさんが手を取り合いバルスと叫んだ、おっさんは眼を押さえながら天に舞い上がった。

入れ替わるように魔女に助けられなかった少年が落ちてきて目の前で潰れたトマトになった。

俺はホップステップジャンプ、錐揉み回転をしながら空き地に滑り込んだ。

「インしたお！」

そのまま土管に突撃。

跳ね飛ばされた土管は隣の雷さんの家につっ込んだ。

「またか！」

雷さんの怒鳴り声。

俺は匍匐前進をしながら、猫の死体でカモフラージュ率を上げ空き地から脱出した。

ズリズリ。

ズリズリと匍匐をしながら裏山に到着。

この場所は俺だけしか知らない。

俺の場所。

このような場所が世界各地に8つほどあったりするらしい。

「にゃー、にゃー！　うーん、にゃー！」

しかし俺の場所であつたはずの場所は既に俺だけの場所ではなくなつていた。

つまり先客である。

猫耳を生やした猫耳子が俺の場所の中心に聳え立つ巨大な木にピヨンピヨンと飛びついている。

新しい技の開発だろうか？

懐かしい、俺もああやって新しい技を木に繰り出すことで、自らを昇華していた夏の日。

あの木の傷一つ一つが若い頃の思い出のかけらだ。

本来の俺、ダークサイドに浸っている俺ならばこの不埒な侵入者にカブト割の一撃を食らわせてやるところだが。

ところがどっこい今日の俺は紳士中の紳士。英語で言うならシンシスト。シンサー。シンセパンツァー！

仏のような心で幼子に接するのであつた、まる。

「一体何をしているのか、小娘よ？ 対空技の練習？ もうちよつとフレーム数小さい技にした方がいいと思うよ。でもやりすぎると調整されちゃうから注意」

「んにゃ？ 違つにゃ。ウチの大切な物が木の上に引っかかっちゃつたんだにゃ。何とも世知辛いことにゃー」

パタリと困った顔に追従するように猫耳が伏せた。

が、すぐにその鋭い眼が俺の持つ棒に止まった。

「そ、その棒は！」

「ノーザンクロスだ。命名は俺」

「それ貸してにゃ！」

「だがこのノーザンクロス、資格が無い物が手にするとそれはもう恐ろしいことになる。書いた小説が壮絶に面白くなったり、自信満々で投稿したものがボロクソに言われたり、感想板が炎上したり、変な人が感想板に湧いたり……あな、恐ろしや！」

「いいから貸すにゃ！」

ふ、いいだろう。

これも世界の意味。全ては黒色彗星の名の下に！

俺の手元から離れるノーザンクロス。

「それで木をなぎ倒すのか？」

「違うにゃ！ そんな危ないことはせんにゃ。限りある資源は大切に、にゃ」

確かに。

枯渴えと向かう資源。

他人事だと、自分には関係ないこととは思ってはいけない。

みんなが力を合わせて考える問題だ。

さて、猫耳少女はノーザンクロスをどう使うのか？

「えいつ、えいつ、にゃにゃ！」

ふりまわしたのだ！

あ、あの刀軌（造語。刀の軌跡）……も、もしや 流れの太刀！？

ああ、なんと素晴らしい！

とかなんとか適当に驚いていたら、ノーザンクロスが木に引っかかっていたブツを弾き下とした、お見事にございます！

猫耳少女はブツを拾い上げて頬ずりをする。

「にゃー、にゃー……うにゃーん」

「にゃんだねそれは？」

「これかにゃ？ これはマグロにゃ」

マグロときた。

うむ、確かにマグロだ。脂がのっついて旨そうである。

じゅるり。

「や、やらんにゃ！」

遠ざけられた。

「触手のところでいいからくれよ」

「……むー、まあ……それぐらいにやら」

やったね！ 言ってみるもんだよ。

猫耳少女は少し未練がましく、マグロから触手を引きちぎりこちらに寄りこした。

おおう、ピチピチとして生きがいい！

あ、ら、らめ！ そ、そんなところに入っちゃらめええ！

「では代わりにこの棒はもらっていくにゃ」

「それおかしくね？」

「何故にゃ？ ブツブツ交換にゃ」

あなたのニキビと私の吹き出物をこうかーん。

そんな感じが。

つか、この触手はマグロを取る為にノーザンクロスを貸したお礼だから、ブツブツ交換する為にはまた少女からなんかももらわないと釣りあわないというかもうなんでももいいか。

「分かったよ、大切にしろよ」

「うむにゃ。一緒に寝るにゃ」

よっぽど気に入ってくれたらしい。

マグロとノーザンクロスを両手に抱えた少女はホクホクとした顔で

俺の場所、もとい元俺の場所から去った。

さて、俺も行くでしょう。

――。

「えーん、えーん」

商店街の中を歩いていると、泣いている妖女（幼女にあらず）を発見した。

やはり紳士が天元突破している俺は、見過ごすことなど出来ず触手に穴を責められながら妖女に近づいた。

「へい、どないしたんユー？ 飼っていた石製インコが死んだのかい？」

「えーんえーんえーん……ん！」

「な、なんだよ……英語で言ってくれよ」

「ドルドルドーーーーール」

おお、なんか欧米っぽい泣き方だ（主観的に）

これが地下だとペリペリペリ……カミみたいな泣き声になるのかしら？

「ほら泣いてばかりいないで、木村拓哉に似ていると近所で噂されてる俺に言ってみな？」

「似てないよ」

マジ顔で言われたよ。

いや、まあ嘘なんだけどね。

木村拓哉から木村拓哉を引いた感じって言われたんだけどね、俺は無かよ。

「あ、あのね、お母さんがお家からいなくなっちゃたの!」

「予想外にハードだな」

てつきりおつかいの内容を忘れたとか、友達とはぐれたとか、DV版なのに湯気が消えないとか可愛い悩みだと思った。

「じゃあ家に一人なのかい?」

「ううん。働かないお父さんと部屋からかれこれ3年出てこないお兄ちゃんがいるよ」

「へびい!」

俺は痙攣しつつのけぞった。

もう、この子は普通にグレてもいいんじゃないだろうか。

「マ、マザーは何ゆえ出て行っただのか?」

「最近ちまたで噂の魔王様を倒しに言っただの」

「グレイトオ!」

あれか、働かない家族のために魔王を倒して財宝がっばがっばか。

てっとり早く金銀を手に入れるいい方法だね。

「なるほど、だから泣いていたのか」

「うっん、それはまた別。親がいるだけマシだし。世の中もつと不幸な人もいるからね。……お兄ちゃんも結構不幸でしょ？」

「まあね、気の持ちようだけだな」

こんな世の中だ。

下を見ればいくらだって下はいる。

大切なのは自分を見失わないこと！（ちょっといいこと言った）

「じゃあ何で泣いてたんだ？」

「……うん、空を見て？」

妖女の言の通り上を見る。

電柱に死体が引っかかっている。

既に3つの太陽は沈みかけ、夕暮れになっている。

辺りでがコカトリスが泣いている。

「……夕暮れを見てたらね、何か涙が出てきちゃったの」「惚れる！」

この子なんかかっこいい！

それはそうとしてそろそろ帰らないと危険だ。

うむ、この流れ的に……

「この触手をあげよう」

「……わ、可愛いっ」

俺を亀甲縛りにしていた触手は喜んで妖女の元へ行った。

やはりむさい男より可愛い妖女の方がいいんだろう。

「で、何かくれ」

「自分で渡したのに。……ま、いいや。はい」

何となく納得できない顔で妖女は自身の影の中から袋を取り出した。

「あげゆ」

「ありがちゅー」

袋をもらい投げキッスをした。

妖女と別れ帰路につく。

帰り道、首の無いヒーローに袋を押し付けかわりにヒーローの乗っていたバイクをもらう。

バイクを乗り回していると免許を持ってないことを思い出したので、汚染された警察所へ突っ込み拳銃を2丁ほど頂いて帰った。

ガンⅡカタでゾンビを撃退しながら帰るとおっぱいのでかい女の人とお腹を出したc v 櫻井の人が現れたので一緒にカナードを撃退した。

勝利の余韻に浸っていると、すっかり夜が更けてしまい、体がドロ

ドロと溶け出した。

「こりゃいかん」

ドロドロとした粘液を垂らしながら全力粘走（造語。ドロドロしながら走ること）で家へ急ぐ。

途中衰れにもドロドロに溶けきってしまったモノがいたので、ありがたく吸収していく。

「チエイサー！」

夢色な感じで飛翔。

「見つけたお！」

住居であるクジラを発見。

夜になったので骨だけになっていた。

「ブラザーインアアアアムズ！！！」

合言葉の共に帰宅。

「……ふう。危うくドロドロのドロロさんになってしまつところだった」

ここで、兵長が治虫っちの漫画のどちらを思い浮かべるかで大体歳が分かる。

「オカエリナサイ、マスター」

作りかけのメイドロボットが出迎えてくれた。

「今日の食事は？」

「タベマシタ」

喰ったのかよ！

何かって聞こうとしたのに！

喰ったのかよ！

「じゃあいいよ。風呂」

「タベマシタ」

喰ったのかよ！

雑食だなあ！

「デハ、ネマス」

自由だなあ！

何だよお前！

乙女回路とか内蔵したじゃん！

乙女なハートとかどこいったんだよ！

わがままハートが走ってるなあ。

もう、俺灰かぶり姫じゃなくていいや。

——ゴマエ、ゴマエ。

む、腹が鳴った。

冷蔵庫に何かあっただろうか。

冷蔵庫を開ける。

「……何も無いわよ」

「そ、そうすか」

冷蔵庫に住んでいる妖精さん（ツンデレ）さんがアイスを食べながら言った。

「……いつまで見てんのよ。今からお風呂に入るんだからさっさと出て行ってよ」

「す、すみません」

「べ、別にあんたの為にお風呂にはいるんじゃないんだから！ 勘違いしないでよね！」

意味が分からないので冷蔵庫を閉める。

『カッサイセヨ、カッサイセヨ』

お、電話か。

埃塗れの電話を取る。

「わざわざ森の〜?」

『ガンコちゃん』

「おお、3号さんか。何か用?」

『こんばんー。明日の宿題やったかなー、って』

……宿題?

ああ。確か出てたな。

「何か週刊誌に持ち込む漫画のネームを書いて来いってやつだろ?」

『それぞれ。あれ意味分からんよね。しかも数学の宿題だし』

「だな。まあ書いたよ」

『どんなん?』

「くともヤッターマン!>って漫画。口癖が『ヤッター、ヨッシャー、——万死に値する』って主人公が海賊王になる為にハンター試験に行つて、東条さんとラブコメちゅっちゅする話」

『あの先生パクリは怒るよ』

「お、お、お、おおおオマージュですう! 変なこと言わんといて!」

『まあいいけど。じゃ、明日ね』

「ああ、ルラーダフォルフォル」

『相手は死ぬ』

ガチャン。

うん、いい友人だなあ。

わざわざ俺が宿題のこと覚えているか確認してくれるなんて。

もしか俺に惚れてるのでは!?

いや、惚れてるね。

むしろこの世の中全ての生物が俺に惚れてるね。

やっべ、俺世界の中心。

いずれ俺を中心としたカタスロフが発生して世界は崩壊。その後発足した連合国家が宇宙に住むスペースノイドと戦争。核という核をうちまくり人口の9割は消失した。後のラグナロクである。

宇宙郡と連合の間で協定が結ばれ、戦争の舞台はネット上へと移行。

これがラグナロクオンラインである。

人が死なない戦争、これは一体何をもたらすのか？ 命とは？ 死とは？ 善とは？ 悪とは？ 善悪相殺とは？

全ての答えがこの夏に。

『劇場版・ラグナロクオンライン 同時放映・シオンの夏休み
——coming soon』

「……なるほど」

良く分かんが世界の真理に近づいた気がするぞ。

「それはそうとして明日は学校だ」

うん、寝るか。

目覚ましを69時にセット。

押入れから布団の様な物を取り出しベトリと敷く。

服を全て脱ぎ、じっとりとした布団の様な物にもぐりこんだ。

「…………おやすみ」

——そして明日も堕ちて行く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6536m/>

ドロドロに溶けた太陽の下で

2010年10月11日18時51分発行